

1：はじめに

1 - 1 卷頭言

島本浣

1 - 2 準備会から関わって

吳智英

1-1：巻頭言

国際マンガ研究センター・センター長 島本浣

京都国際マンガミュージアムが開館して10年以上が過ぎた。マンガの教育・研究に長年取り組んでいた京都精華大学と、伝統と革新を文化政策のひとつとする京都市が共同事業として立ち上げたのが、マンガの博物館と図書館を兼ね備えたマンガの総合施設としてであった。国際的であることを意識したのは、日本のマンガがクールジャパン的認識を超えて、社会や世界を構造的に捉える人類史的規模での新しい表現領域だと考えてのことであった。ミュージアムがマンガの実践の場であるとすれば、その実践を研究・検討し、実現するのが国際マンガ研究センター（以下センター）である。

センターの歴史と活動内容、そしてこれまでの実績に関してはWEBサイト(<http://imrc.jp>)に詳細があるのでご覧いただきたいが、センターはミュージアム開設と同時に設立された研究機関である。サイトに記録されているように、これまでの11年間ほどの間に数え切れないほどの企画展、国際会議、イベント、さらにワークショップ等々を行い、ミュージアムの活動の中核を担ってきた。そうした多様なプログラムをつくり練り上げたのはセンターに所属する研究員たちである。その精力的な活動がなければミュージアムの繁栄もなかっただろう。

「研究」センターと名乗っているが、その研究は従来のアカデミックなかたちを超えていると思う。研究対象のマテリアルを集め分析し外部に発信するという原則は同じだが、マンガという領域は幅が広い。というより、マンガが従来の視覚芸術とは異なった出自と展開を持っている以上、その研究的アプローチも同じではない。加えてマンガの研究はま

だ新しく、これからの研究領域でもある。

その意味では、設立以来のセンターの年月は研究の試行期間とも言える。旧来の視覚芸術研究のノウハウを継承しつつ、それらとは何が違うのかを見きわめてきた歴史もある。ミュージアムという施設で一般的に刊行される「年報」という報告集をこれまで出してこなかったのも、マンガ研究の複雑さと多様性への戸惑いだったのでないかと思う。マンガ（広い意味での）という領域は無限とも言える研究領域の広さをもっている。先に書いた「人類史的」という言葉のひとつの意味もある。しかし、11年近くの歴史を積み重ねてきた今、次の一步を踏み出したいとも考えた。本年報はその最初のマニフェストでもある。

これまでのセンターでの研究の歴史にはすでに新しい方向が芽吹いている。例えば、2017年度で10回目を迎えた「マンガクッキング」という企画イベント。ミュージアムの名物ともなっている。うえやまとちの雑誌『モーニング』での連載マンガ「クッキングパパ」(単行本で143巻を数える)を紹介しながら、作中の料理をミュージアムで実演・試食するという企画である。「ああマンガグルメ企画ね」とスルーしてしまうようになるが、そうではない。「マンガクッキング」は普通に考えるようなマンガの内容が実演される「グルメ企画」ではないのだ。

「マンガとは」、「その独自性は何か」という問題はいつも論じられてきたし、これからも論じ続けられるだろう。研究という営みのサガ(性)とでもいうべきこの「何か?」への問いは、マンガでは特別の意味合いが

あるとも思う。マンガは他の視覚芸術研究に遅れてやってきた領域である。その「遅れ」の意識がマンガ研究には取り付いているはずだ。しかし、この意識こそが逆に研究に活気と未来を与えるものとなっている。少なくとも私はそう考えている。つまり、マンガそのものが従来の一あるいは近代の、と言ってもいいが一視覚芸術とは、同類のようでいて、大きく違っているところが多いからだ。

卷頭言としては少しややこしい話になるが、誤解を承知の上で単純化してしまえば、マンガは「パロール」(parole：仏語で一般に話し言葉／発話行為) の芸術表現である。この言葉は言語学者のソシュールに由来するが、フランスの哲学者ジャック・デリダによって広く使われるようになった言語的概念である。マンガがパロールだとすれば、従来の視覚芸術は、パロールの対立概念であるラングに基礎を置いている。ラングとは記号としての言語体系で、辞書などに集約される（先のデリダはラングをエクリチュール(書き言葉)に置き変えている）。つまり、マンガは発話的芸術で、絵画のような芸術はラング的なそれなのである。マンガを広く観察すれば、そこにもこの二つの概念が見られる。例えば、フランス語圏のバンド・デシネ(BD) はラング性が色濃い。きっちとした絵画的表象(違うものも少なくないが) と書き言葉が物語を紡ぎ出すBDはパロール的なマンガとは距離を持つ。

このあたりを説明・分析していくと卷頭言の役割を超てしまうのでここまでにするが、マンガは従来の視覚芸術(絵画や写真に代表される)を逸脱している、極端に言えば、基本的なところで異なった芸術表現なのだ。マンガ研究はこのことを強く意識する必要があると私は考えている。繰り返せば、マンガは「パロール」のという発話行為と深く結びついた表象なのだ。発話は直感的で感覚的、論理的でないことも少なくない。「パロール

は現在にある」。デリダのパロールの説明のひとつである。マンガはこの「現在性」としての表象に深く関係しているのだ。

こんな風に考えてみると、クッキングパパの料理の実演がどうしてすんなりとマンガそのものと結び付くのかもわかってくる。マンガも料理も同じように現在に関わる発話的行為だからである。この発話としての表現と表象は、おそらくネット時代のコミュニケーションのベースになっているものだろう。ツイッター、ライン等々のソーシャルメディアで行われているのは、書き言葉的コミュニケーションではなく、発話の、つまりパロールのそれなのだ。マンガが発話的表現だとしたら、時間的に発話的表現史の最初期に誕生してきたと言えるだろう。先に書いた、マンガ研究の「遅れ」は、時間を遡行してみれば「新しい」ものだったのだ。ここにマンガ研究の将来があるのであるではと考えている。

硬い卷頭言になってしまった。私がラング的芸術に浸ってきたためかとも思う。2016～17年度に行われたマンガミュージアムでの展覧会と企画を振り返ると、ラング的硬さとは別の柔らかで自由な芸術経験の場が提供されてきたかがわかる。棚に並んだマンガを取り出し、ミュージアムの庭に寝転がってマンガを見ている来館者、マンガ似顔絵を嬉々として描く(あるいは描いてもらう)来館者たちにこそ、マンガが「何である」のかのもっとも深いところを感じているのかもしれない。

1-2：準備会から関わって

国際マンガ研究センター / 国際マンガミュージアム・研究顧問 呉智英

本ミュージアムは、今年の秋で開館12年になる。その数年前の企画段階から準備会の一員となり、開館後は研究顧問となってきた私としては、本ミュージアムの発展・充実に喜びを覚えるとともに、さらなる飛躍のための課題も克服していかなければならないと思う。

会館前には、30万点のマンガ資料と謳いながら、果たしてそれだけ揃えられるだろうかと不安であったが、開館時にはそれが満たされた。安心する間もなく、今度は購入・寄贈による資料の加速度的増加という難問が現れた。書庫要領の限界の中で収集方針を微調整しつつ、資料の体系性・網羅性を確保しなければならない。これは、同種の他館との連携によるしかない。こういった運用システムの確立も、パイオニアたる本ミュージアムの重要な役割となろう。

そんな12年であったが、全体的には世界的にも珍しいマンガミュージアムとして大成功であったと言えよう。外国人を含む来館者も増え続け、京都の新しい観光スポットとなっている。展示やシンポジウム等の企画も、マンガ研究に寄与するものが多く、単なるアミューズメントに終わってはいない。これは特に研究員の努力によるところが大きい。全国に散在するマンガ資料の情報をを集め、マンガ作品を読み込み、マンガ家との対話を交わす中で、新しいテーマを見出すのである。こういった成果は、日本マンガ、またマンガ研究の大きな基盤を成すに至っている。

ミュージアムの建物についても一言触れておきたい。この建物は、旧龍池小学校校舎を改装したものである。龍池小学校は明治2年(1869年)に開校した歴史ある小学校だが、都心部の人口減少により平成7年(1995年)

に廃校となった。校舎は昭和初年に鉄筋作りで再建されたものが残った。この校舎自体、昭和初期の建築様式をうかがい知る文化遺産である。開館準備のため内部の見分を何度も行なったが、階段や壁面を見るにつけて当時の職人技術の見事さに驚嘆した。当初壁面にマンガを描くという案も出されたが、私は現状保存を提案し、これが了承された。一世紀近い歴史を持つ学校の校舎とマンガ文化が融合していて興味深く感じる来館者も多い。歴史的建築物の保存活用の先行例としても誇りうるものだと思う。